



Title	十月革命における左翼エスエル
Author(s)	高岡, 健次郎; Takaoka, Kenjiro
Citation	スラヴ研究, 32, 127-152
Issue Date	1985
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5149">https://hdl.handle.net/2115/5149</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113245.pdf



# 十月革命における左翼エスエル

高 岡 健 次 郎

## は じ め に

1983年の2月と4月、『歴史学研究』は「ロシア革命の再検討」というテーマで2度にわたる特集を組んだ。編集委員会は、その趣旨を、ポーランド等の情勢やスターリン時代の歴史分析の進展によって「社会主義とは何かへの関心」が新たな高まりをみせており、現存する社会主義国家への「歴史的展開の起点に位置するロシア革命ないしロシア革命像の再検討は、歴史学研究にとって不可欠の課題をなしている<sup>1)</sup>」と述べている。本小稿は、このような問題意識を共有する立場から、十月革命期における左翼エスエルについて、とりわけその政治的歩みに内在する主張、論理について検討を加え、「ロシア革命像の再検討」をすすめる際の一前提または一素材として、いわば左翼エスエルのロシア革命像、より正確にはその十月革命像を探ろうとするひとつの試みである。

ところで、この時期の左翼エスエルに関しては、依然としてその輝きを失っていないラドキーの優れた研究<sup>2)</sup>があり、またグーセフの業績をはじめとするソヴェト史学の諸研究も、決して軽視しえない蓄積をもつに至っている<sup>3)</sup>。わが国においては、左翼エスエルの全史を概観した加藤一郎氏の研究などの外に、ロシア革命における統一戦線の問題に着目し、そのような視点から当時の左翼エスエルの動向にも切りこんだ和田春樹氏の研究、最近では、ポリシエヴィキ党「指導集団と活動家大衆の指導—被指導の関係を軸」に革命史の一時期を再構成する中で、やはり左翼エスエルの動きにも可成の紙幅を割いた石井規衛氏の研究などが、本小稿の内容とも交錯する主要な文献として挙げられるであろう<sup>4)</sup>。

これらの諸研究の存在と内容、それと上述した小稿の基本的意図等を踏まえて、われわれは、本文の記述に際し、予めお断わりしておくべき幾つかの限定あるいは留意点を設けた。それは、まず第一に、この間の事実経過それ自体への言及は最小限にとどめ、主として新聞『ズナーミャ・トルダー』を資料に用いつつ、左翼エスエルの政治行動を貫く内的論理の展開過程を追跡する点に、記述の力点をおいたことである。次に今回の小稿では、

1) 歴史学研究会編集委員会「ロシア革命像の再検討——特集にあたって」『歴史学研究』513号、1983年2月、1頁。

2) O. H. Radkey, *The Sickle under the Hammer*, New York and London, 1963.

3) K. B. Гусев. Крах партии левых эсеров. М., 1963 (拙訳『左翼エスエル党の崩壊』白馬書房、1978年); Он же. Партия эсеров. М., 1975, и др. また、次の拙稿で近年のソ連における左翼エスエル研究にも若干言及した。『ロシア非プロレタリア政党』に関するソ連の研究状況』『札幌学院大学人文学部紀要』35号、1984年7月。

4) 加藤一郎「左翼エス・エル党小史」菊地昌典編『ロシア革命論』田畑書店、1977年。和田春樹「ロシア革命における統一戦線」『思想』1967年9月号。石井規衛「ロシア革命からソヴェト国家へ——指導集団と活動家大衆(1917年9月—1918年5月)」『歴史学研究』515号、1983年4月。これら以外にも関連文献は少なくないが、ここでは割愛する。

検討の範囲を、十月武装蜂起の前夜から始めて、其の後の彼ら自身による統一戦線論の展開に留意しつつ、ポリシェヴィキとの政府ブロック＝「統一戦線政府<sup>5)</sup>」の形成に到達するまでの間としたことをつけ加えておかなければならない。もとよりこの期間は、小稿の主題からみて独自の重要性をもつ時期だとはいえ、それ自体として変化する左翼エスエルの十月革命像を探るにはいかにも短い。小稿はその意味からも、今後のひき続く検討を予定した中間報告ともいうべき位置づけをもつものであること——、この点がここでお断わりしておきたい最後の点である。

以下、2章に分けて検討を進めていくが、その第1章第1節を、われわれは、武装蜂起計画に対するエスエル左派の反応の記述に先立つ「序論」的意味合いもこめて、小稿の主要な資料「新聞『ズナーミャ・トルダー』が新しい政党になろうとしている左派の機関紙になった<sup>6)</sup>」エスエル党ペトログラート市協議会の経過から書き始めることにする。

## I. 十月武装蜂起前夜のエスエル左派

### (1)

1917年9月10日、エスエル党の第7回ペトログラート市協議会が開かれた。協議会には、45,300人の党員を代表する157名の決議権をもつ代議員が出席したが、この会議を境にこの首都の大組織は党内反対派としての左派に牛耳られるところとなり、全国的に進展していた左翼的潮流の成長を象徴する事例のひとつとなったことは、よく知られている。

この会議で「現時点についての報告」を行なったのは、チェルノフ (В. М. Чернов) であった。ロシア革命の歩みを3期に会け、第1期(2月27日—7月3日)を民主主義派(демократия)の力の成長、ソヴェトの最重要な位置、第2期(7月3日—コルネーロフ事件)を革命の歩みの休止、ソヴェトの役割の低下と特徴づけた彼は、第3期、すなわち報告当時について、再び増大したソヴェトの影響力をひと先ず挙げた。だが彼は、事態の全面的な特徴づけのためには、下部あるいは「深部の活動」の実状に目を向けることが不可欠だとし、「信じ難い棄権」がみられる郷ゼムストヴォ選挙の例を挙げて、結果は「極めて悲観的」であり、革命は「激しい、だが表面的な波」にとどまりかねぬ恐れを指摘する。

このような大局的な状況の捉え方とも関連して、彼がソヴェトの強弱両面に言及した個所も触れておくに値いしよう。彼がいうには、ソヴェトの強い側面は、政治指導、革命的勢力の行動への動員という点にみられ、弱い側面は、地方におけるソヴェトの実務的側面にみられる。そこでは創造的力は、あるいは「民主主義派の力は、ソヴェト、協同組合、自治機関の間に分散配置されている」。彼は、このことを重視し、力を引裂くのではなく、力を結集する必要があるという<sup>7)</sup>。

この協議会が開かれた9月10日という日付は、いうまでもなく、コルネーロフ反乱の過程で第2次連立政府が崩壊し、第3次連立が成立するまでの過渡的体制として「五人評

5) 和田春樹、前掲論文、42頁。以後この用語が各所で使われていることはいうまでもない。

6) Октябрьское вооруженное восстание, кн. 2. Л., 1967, с. 243.

7) 《Дело народа》, 12 сентября, 1917; 《Знамя труда》, 12 сентября, 1917.

議会」（「執政府」）が置かれていた期間に属しており、本来の新政府をいかにして構成するかという問題は、当面する最大の政治問題として各政派の耳目を集めていた時期にあたる。労兵ソヴェト・農民ソヴェトの合同執行委員会総会は、「政権の危機」を解決するため、いわゆる民主主義会議の招集を決定したが、この会議は予定より2日遅れて9月14日から開始された。

「現時点に関する報告」の中心問題は、当然にもこの新政権の構成をめぐる問題ということになるが、この点についてチェルノーフは、上記のようなソヴェトに関する論及に続けて次のように述べる。「民主主義会議が政権の危機を解決しなければならない。もしもソヴェト大会がこの課題を引き受けるならば、ソヴェト大会は広範な民主主義派の諸層をつきはなすことになるだろう。ロシアは力に乏しく、仕事は多い」<sup>8)</sup>。また彼は、カデットとの連立は不可能だと明言した上で、「人民自由党に代表される 戦闘的有産者層と社会主義者との間に中間的分子」が存在すると述べ、社会主義派の側がこれらの中間的分子へよびかけていく必要を示唆するのである<sup>9)</sup>。ここで示されているチェルノーフの見解は、この直後に開かれた民主主義会議の席上でもくり返されることになるが、それは、われわれがかつて特徴づけた表現を用いれば、当時のエスエル左翼中央派の立場を示す「カデット排除・ブルジョアジー選別の連立論」、「『狭い連立』の政府」構想そのものであるといえよう<sup>10)</sup>。

この報告をめぐる討議の中で左派の代議員から提起された反対意見は、これもその後の民主主義会議の席上でくり返される左派の一貫した主張、「同質の社会主義政府」論に通ずるものであることはいうまでもない。「同質の」政府とは、「異質の」もの、つまり有産者分子 (цензовые элементы) とその党カデットを排除した政府ということであり、それは何よりも先ず徹底した連立反対の主張なのである。『デーロ・ナローダ』の記事は「極端な左翼の発言者」として8人の名前を挙げているが、そのひとりアルガソフ (B. A. Алгасов) の発言の一部を引いておこう。

「協調主義か、それとも自主的コースか、という2つの政策、2つの行動路線がある」と指摘した彼は、次のように続ける。「連立はその正体を現わした。連立と縁を切らなければならない。それはコルネーロフ反乱をもたらすに至った。会議〔民主主義会議〕を組織したのは正しくない。それはまったく必要がなかった。必要なのは、ソヴェト大会であり、必要なのは同質の政権である。個人的政策の余地も存在しない。ケレンスキーと最終的に袂を分かつ必要がある」<sup>11)</sup>と。

討議の後、左派のひとりザークス (Г. Д. Закс) によって提案された決議が「棄権8を除く満票」で採択されたが、この表決結果はすでに触れたこの協議会における左派の優越した力関係を如実に示している。この決議が権力問題で「同質性および革命的民主主義派の中央諸機関に対する責任性の原則」を謳っているのはいわずもがなのことであるが、決議はさらに「新政権の先ずなすべき方策」を挙げているので、当時のエスエル左派の具体

8) 《Знамя труда》，там же.

9) 《Дело народа》，там же.

10) 拙稿「ロシア臨時政府に関する一考察」(下)『スラヴ研究』17号，1973年，181-182，199頁。

11) 《Знамя труда》，там же.

的政策を示すものとして、その要点を摘記しておく。すなわち、すべての土地と農具の土地委員会による管理への移行・工場委員会による生産の統制・8時間労働日に関する立法、所有階級への最大限の課税、農民の日常品の固定価格による供給、軍隊民主化のための応急措置、全戦線での全面休戦の即時提議、民族自決原則の実現、ドゥーマ・国家評議会・陸海軍士官同盟その他反革命諸組織の解散命令、等がそれである<sup>12)</sup>。

このあと協議会はペトログラート委員会の選出へ移り、12名からなる新委員会が構成されたが、周知のように、そのうちの圧倒的多数を、スピリドノヴァ (M. A. Спиридонова) カムコーフ (Б. Д. Камков) をはじめとする左派が占めた<sup>13)</sup>。

この結果は、「エスエル党ペトログラート委員会刊行」の機関紙『ズナーミャ・トルダー』の紙面に直ちにはね返る。第19号(9月14日)からそれまでの編集部の名前が消え、この号の一面トップに大きな活字で次のような7項目の要求ないしスローガンが列挙されるのである。

「I. われわれは全ロシア労働者・兵士・農民代表ソヴェト大会の招集を要求する。II. 地主、工場主、銀行家、商人とのいかなる連立、いかなる協定も求めない。III. われわれはすべての土地を土地委員会へ引き渡すことを要求する。IV. われわれは生産の労働者統制を要求する。V. われわれはツァーリのドゥーマの解散を要求する。VI. われわれは全戦線における全面的休戦を要求する。VII. 第三インターナショナル万才<sup>14)</sup>」

この7項目はそのまま第23号まで連載され、この間、第21号から完全に左派が支配する新編集部の氏名が見られるようになった<sup>15)</sup>。要するに、『ズナーミャ・トルダー』は当然の帰結として左派の掌握するところとなったのである。この『ズナーミャ・トルダー』は、さしあたりはペトログラート組織の機関紙ではあったが、首都の大組織がもつ実質的な指導力からみても、また、十月武装蜂起後まもなく「エスエル党ペトログラート委員会および第2回全ロシア・ソヴェト大会中央執行委員会エスエル左派フランクツィヤ機関紙」へ、左翼エスエル党成立後の第105号(12月28日)から「左翼エスエル党中央委員会機関紙」へと変わっていく経緯をみても、それは、第7回ペトログラート市協議会後は、エスエル左派＝左翼エスエル指導層の主張を全体として最もよく代弁し反映した機関紙となったとあって差支えないであろう。

以後の『ズナーミャ・トルダー』の基本的論調を、さしあたり十月武装蜂起までの時期を念頭においてとり出すとすれば、何よりもまず、ソヴェト組織・ソヴェト大会へよせるエスエル左派の期待と位置づけの大きさという点を挙げることができる。

編集部を左派が掌握した次の号(第20号)は、「さらに一步！」と題する無署名の論説を掲載するが、その内容は、大要、二月革命後の経過を、ソヴェトに依拠することも可能だった政府がそれに背馳し、ソヴェトもまた「漸進的連立的移行」の道を選んだ経過、大

12) Там же.

13) 《Знамя труда》, 13 сентября, 1917.

14) 《Знамя труда》, 14 сентября, 1917.

15) 《第21号(9月17日)に現われた編集部は、П. П. Деконский, Р. В. Иванов-Разумник, Б. Д. Камков, Е. М. Кац, С. Д. Мстиславский, Н. П. Смирнов, М. А. Спиридонова. なお、第25号より Смирнов の名が消え、第39号(10月8日)からは、編集部全体の表示がなくなった。

衆の自主的決起、「アナーキー」への恐怖の中で、政府がモスクワ国家会議、次いでより狭い民主主義会議にその基盤を求め且つ失敗する経過として描き、ブルジョアの反革命の陣営ときっぱり手を切るのであれば、権力はその基盤の選択をより狭める方向へ「さらに一步」進み「ソヴェトへ立ち戻らねばならない<sup>16)</sup>」と結論づけたものである。行論の過程で、ソヴェトを「革命的共和国擁護」のために勇敢に抵抗した唯一の組織、革命の当初からすべての「革命的民主主義派」(революционная демократия)の政治的代表部が集中した唯一の組織と評価し、「革命的民主主義派は、自己の政治的意志の表明のために別の機関を作り出さなかったし、また別の機関を必要としない<sup>17)</sup>」と述べている個所があるが、ソヴェト組織への彼らの思いを示す一例であろう。

第26・27号(9月23・24日)には、いわば全段ぬきの大見出し風に、「全ロシア労働者・兵士・農民代表ソヴェト大会の即時招集！」というスローガンが掲げられるが、丁度この頃、労兵ソヴェト中央執行委員会が大会開催要求を受け入れ、10月20日に第2回大会を招集することを決定したのに伴い<sup>18)</sup>、第29号(9月27日)からは、「同志諸君、全ロシア労兵ソヴェト大会——10月20日へ向けて準備せよ<sup>19)</sup>」というスローガンが代わって登場する。この間、例えば第28号(9月26日)には、ペトログラート委員会の一員デコンスキー(П. П. Деконский)の論説「10月20日」が掲載され、ソヴェト大会までの残された期間、各地方ソヴェトは大会準備特別委員会を設けて「ソヴェト代議員が完全武装して大会に出席できるような資料を整えること」など、具体的な大会準備の方策が提起されている。「10月20日の大会——ここにすべてのわが当面する活動の合言葉がある<sup>20)</sup>」。デコンスキーはこのようにその論説をしめくくっている。

これらの論説にみられるエスエル左派の主張は、彼らをとりにまく政治情勢とのかかわりでみれば、上述したその内容からも分かるように、9月14日から22日にかけて開かれていた民主主義会議の進行を見据えつつ、あるいはその不毛の経過を振り返りつつ表明されていたのであるが、それはまた、前方の憲法制定議会の政治日程を考慮しつつ主張されてもいた。9月25日に漸く発足できた第3次連立政府は、その政府声明の中で、「憲法制定議会の招集は一日といえども延期されえない<sup>21)</sup>」と宣言したが、だとすれば予定日は11月28日となる。『ズナーミャ・トルダー』のトップには、第34号(10月3日)から、先述の大見出し風スローガン「同志諸君、全ロシア労兵農代表ソヴェト大会——10月20日へ向けて準備せよ」に並べて、大きく「憲法制定議会へ向けて準備せよ」というスローガンも掲げられるようになった。

16) 《Знамя труда》, 16 сентября, 1917. 引用句中の傍点部分は原文ではイタリック体。とくに断わらぬ限り以後も同じ。

17) Там же.

18) 9月23日に決定している。Великая октябрьская социалистическая революция. Хроника событий, т. 4. М., 1961, с. 158. 以後 Хроника と略記。

19) このスローガン中の「労兵」という部分は、次号から「労兵農」となり、「10月20日」の部分は第49号(10月21日)から「10月25日」に変わる。

20) 《Знамя труда》, 26 сентября, 1917.

21) Революционное движение в России в сентябре 1917 г. Общенациональный кризис. М., 1961, с. 234.

権力の基盤をソヴェトに求めるべきことを主張するエスエル左派は、この時期、ソヴェトと憲法制定議会との関係をどのようなものとして捉えたのか。この点について、例えば10月3日のトップに位置するムスチスラフスキー（С.Д.Мстиславский）の論説は、憲法制定議会が、ブルジョアジーと大衆運動の双方から起こりうる合法性逸脱の可能性に面しつつ安定した活動を続けるためには、地方に強固な足場が必要であるとし、ソヴェトをそのような役割を担う唯一のものとして位置づけようとする<sup>22)</sup>。また3日後の6日、無署名の論説「つつかんで離さぬ手…」は、ソヴェト大会は「民主主義派の昏睡状態」で消失した大衆の気概の新たな昂揚へ導き、その諸決定は選挙戦で大きな役割を果たすこと、とくに「革命的民主主義派の『気概の低下』」による棄権についてそれがいえることを指摘し、ソヴェト大会の課題と憲法制定議会は密接に結びついており、前者の招集は後者の総りある活動の基本条件、その不可欠の一階梯であると述べる<sup>23)</sup>。

これらの議論は、一見して明らかなように、2つの大きな課題に取り組む際の実践的統一の視点を提起しているものであり、ソヴェト大会を憲法制定議会への直接的脅威だとする大会招集反対のキャンペーンが生じている状況下で<sup>24)</sup>、それなりに重要な意味をもつ議論といえるのであろうが、両者の関係を考える場合に当然にもその核心となるべき権力問題の視点から論じたものとは言い難い。この頃の『ズナーミャ・トルダー』の紙面においても、勿論このような論点が意識されないわけではなかった。一例としてムスチスラフスキーは、「ソヴェトについて」という論説の中で、ポリシェヴィキ的な「ソヴェトは国家なり」と言わんばかりの考え方、エスエル＝メンシェヴィキ的中央執行委員会の「ソヴェトの自主解散」を云々する考え方を、ソヴェトの意義・本質に関する両極端の立場として批判しつつ、ソヴェトと「普通選挙で選ばれた議会」との共存は可能かという問題に触れている。だが彼は、この設問がもつ「一定の意味」に言及するだけでそれより先へは進まず、「われわれは幸い議会を持っていない」が故に、現時点ではまだ問題は提起されていないとして、設問への答を避けるのである<sup>25)</sup>。彼らのこの論点に関する解答は、憲法制定議会が現実の形姿をとった十月革命後に、実際に提起された問題に答を迫られる形で出されることになるろう。

ところで、ムスチスラフスキーの論旨からは、ポリシェヴィキを「両極端」の一方に据え、自らの立場とポリシェヴィキのそれを区別しようとする姿勢が窺われるが、他のエスエル諸派からは、彼ら左派に対して、エスエルの枠をはみ出たポリシェヴィキ的ないしマクシマリスト的な「デマゴグ」だといった種類の厳しい批判が加えられていた。例えば中央委員のブリレジャーエフ（И. Прилежаев）は、『デーロ・ナローダ』の紙上で、左派が提起しているとするスローガン——「わが革命は社会革命だ！」「全権力をソヴェトへ」「土地の即時没収」「生産の労働者統制」等々を列挙しつつ、これらは「本質的にすべてポリシェヴィキ的なもの」であり、「それ故にエスエルのものではない」、それは「ポリシェヴィキから借りされた」スローガンだときめつけ、「残念なことに『左翼』エスエ

22) 《Знамя труда》, 3 октября, 1917.

23) 《Знамя труда》, 6 октября, 1917.

24) См. там же.

25) 《Знамя труда》, 14 октября, 1917.

ルは、自分たちのスローガンをなぜかいつもボリシェヴィキによって使われ出した後からのみ提起する<sup>26)</sup>」と皮肉っている。

かつて指摘したことがあるように、エスエル左派は、独自の党を創立する時点においてもその綱領的要求、「社会的哲学的」見地をエスエルと共有していたのであり、プリレジャーエフのように、左派の政策的立場をエスエルとは無縁な「ボリシェヴィキ的なもの」とするのは、論争が生み出す批判の片面的な単純化であろう。だが反面、「社会革命」への基本的姿勢、連立の否定、ソヴェトの位置づけなどの点で旧稿でも触れたエスエルとの相異点が存在することは、小稿のこれまでの記述からも明らかであり、この点がその後ボリシェヴィキとの政府ブロックの成立を可能とさせる直接的要因となることは、改めてここでくり返すまでもない<sup>27)</sup>。その意味では、プリレジャーエフ流の批判的記述はまったく根拠のないものではないし、少なくともムスチスラフスキーが匂わせる「中道的」立場よりは、この時期のエスエル左派は、はるかにボリシェヴィキに近い位置に立っていたといえることができよう。

## (2)

しかし、まさにこの時期、10月の中頃から、エスエル左派とボリシェヴィキとの間に、新たな重大な対立点が現われはじめた。それは、ボリシェヴィキによる武装蜂起計画の始動に対するエスエル左派の批判である。

『ズナーミャ・トルダー』で見られるこの種の批判の最初のものは、10月13日のムスチスラフスキーの論説「うわさ」であろう。「再び『ボリシェヴィキ』が準備しつつある出動(выступление)の不安な暗いうわさが町中に広がっている」という一文で始まるこの論説は、現時点での労兵大衆の「出動」は、政府に対してというよりは、ソヴェトそのものに対する「最悪の最も犯罪的な企み」であると攻撃する。この批判の根底にあるのは、来たるべきソヴェト大会の成功による「ソヴェトの再生」への期待であり、また、その「再生」は大会から「冒険主義」「発作的行為」「大衆の移ろい易い気分へのデマゴグ的譲歩」のどんなかげりも除去する時にのみ可能となるのであって、うわさの如き「出動」は協調派やブルジョア勢力が狙うソヴェト大会の挫折・失敗を必然化するやり方だとする見方である<sup>28)</sup>。このような観点は、以後もボリシェヴィキの武装蜂起計画に対する批判の一基調となるであろう。

またここで、「ソヴェトの再生(возстановление)」という言葉が語られている点について一言しておきたい。この言葉の背後には、いうまでもなく、ソヴェトの実状に対する厳しいマイナス評価があったし、そのような状況への憂慮は可成の広がりをもって各派の指導的メンバーの心を捉えていた。それは、例えば、すでに触れた10月6日の論説の中にあった「民主主義の昏睡状態」「革命的民主主義派の『気概の低下』」という言い方にも現われているし、さらに『デーロ・ナローダ』の紙面からも一例を補うとすれば、9月27日の無署名論説の中で、ボリシェヴィキとエスエル左派の強化と並ぶ「人民大衆の疲労と倦

26) 《Дело народа》, 26 сентября, 1917.

27) 拙稿「左翼社会革命党の成立をめぐる」『北大史学』10号, 1965年, 49-60頁, 参照。

28) 《Знамя труда》, 13 октября, 1917.

怠」の増大、投票率の低下、集会への参加者数の減少、等々の諸事実が、これと平行する右翼的反革命的勢力の成長への危惧と共に具体的に語られている<sup>29)</sup>。こうしたソヴェトのあるべき姿と実状とのギャップをめぐる深刻な危機感は、エスエル左派の指導層をして、その決定的な転機となるべきソヴェト大会への期待、そしてその足元を掘り崩すと思われた武装蜂起計画への忌避感を一層強める要素となったものと思われる。

このソヴェト大会への期待は、10月17日の無署名論説「中心」などで、いま一步具体化された表現を受けとる。ここでも同様に「街頭出動」が敵に対する「最大の援助」として攻撃されているのは勿論であるが、さらに「その心理的原因そのもの」を一掃するためとして、全ロシア・ソヴェト大会が「権威ある平静な言葉 (властное и спокойное слово)」を表明し、「本源的な真の『中心』」を再生させることが提唱されるのである<sup>30)</sup>。この前日には、「共和国臨時評議会」でサープリン (Ю. В. Саблин) がエスエル左派を代表して登壇し、民主主義派がソヴェトの周囲に団結し、ソヴェトにおいて「平和と革命的民主主義派の独裁」への「断固たる意志」を宣言すること、「革命の権威ある声が革命的民主主義派をしてこの権力創設へ着手せしめる瞬間へ向けて準備すること<sup>31)</sup>」をよびかけると声明していたが、上記の論説がいう「権威ある平静な言葉」への言及は、サープリンがいう「革命的民主主義派の独裁」への意志表明を除外したものとみるよりは、その可能性をも含む提唱とみるのが自然であろう。

『ズナーミャ・トルダー』でのポリシェヴィキ批判は、蜂起の決定的行動が開始される10月24日まで続く。同紙には、ムスチスラフスキーの長大な論説「闘いの進路」が第50～52号(10月21, 22, 24日)にわたって連載され、「今の条件では蜂起は無意味だ」「その結果と無関係に犯罪的だ」といった言葉で、厳しいポリシェヴィキへの批判が展開されるのである。また、この論説には、革命を政治的段階から社会的段階へ継起する過程と捉え、蜂起は前者をさえぎり、後者への移行を放棄するに等しい行為とする見方、政治的形態の改造は社会的経済的改造の結果にすぎないのであって、勤労大衆がソヴェト・労働組合をもつロシアでは、性急に古い国家装置を破壊する必要はないとする主張、漸く時みちて、ソヴェト大会が社会的土台の組替をその課題とする筈だった時に、国家権力を偶像視するレーニンは、社会戦線へ集中した力を再び政治戦線へ移そうとしているとする批判などに、戦術的次元での対立の基底にある独特なエスエルの発想が垣間みえて興味深い<sup>32)</sup>。

ムスチスラフスキーの論説を重ねて取り上げていることもあるので、もうひとり、エスエル左派の指導的中核を構成するカムコーフの発言をつけ加えておこう。彼もまた、10月17日から22日にかけて開かれた全ロシア工場委員会協議会<sup>33)</sup>でこの問題に触れ、「われわれは現時点での出動は最大の政治的誤謬だと考える。目下の条件はブルジョアジーとのむき出しの闘争に好都合ではない」と批判した上で、全ロシア・ソヴェト大会での「威信ある言葉 (веское слово)」への期待を語り、そこにこそ「われわれは憲法制定議会の時宜

29) 《Дело народа》, 27 сентября, 1917.

30) 《Знамя труда》, 17 октября, 1917.

31) Там же.

32) 《Знамя труда》, 21, 22, 24 октября, 1917.

33) Хроника, с. 469.

に適した招集の最良の保証を見いだす<sup>34)</sup>」と述べていた。

後にカムコーフは、左翼エスエル党創立大会の席上で、ソヴェト大会の少し前にポリシェヴィキの大会前の蜂起・権力奪取の企図が明らかとなり、「この問題でわれわれは彼らと激しく意見が分かれた」と述べ、つづけて、彼らエスエル左派は連立政府の完全な破産、孤立の後、ソヴェト大会によって何の苦痛もなく、その残骸を放逐できると考えたこと、この場合、ソヴェト大会は労兵のみでなく農民代表大会ともなるよう努力したことなどに触れて、このようなソヴェトが連立政府の廃止を宣言し、新政権創設の任務を引き受けるなら、これに反対できるものは殆んどなかった筈だとしている。これと異なる道は、不可避免的に内戦へ通ずるといっているのである<sup>35)</sup>。エスエル左派の指導層は、大会前の武装蜂起というポリシェヴィキの方針に直面して、様々な意見のニュアンスを帯びつつも、労兵農ソヴェト大会での総意に基づく新政権の組織という次第に明確化する構想を抱きつつ、この時期このようにして、公然たるポリシェヴィキ批判の論陣をはったわけである<sup>36)</sup>。

しかし、首都の労働者、兵士の間では、武装蜂起へ向けて大衆的な結集がすすみ、当然のことながら、その中には左派がリードするエスエル組織のメンバーもその支持者も含まれていた。例えば、ペトログラート労兵ソヴェトの兵士セクツィヤは、10月13日に283対1(棄権23)で蜂起の大衆的な司令部となった軍事革命委員会の設置を受け入れたが<sup>37)</sup>、丁度そのひと月前に行なわれた兵士セクツィヤでの執行委員の改選では、エスエルの名簿が155票(ポリシェヴィキは138, メンシェヴィキは39)を獲得しており、そのような力関係を反映して、兵士セクツィヤ幹部会の構成も、エスエル3, ポリシェヴィキ3, メンシェヴィキ1となり、セクツィヤ議長にはエスエル左派のヂエスペロフ(Л. И. Диесперов)が選ばれていた。幹部会のエスエル3人のうちには、短期間ながら軍事革命委員会の初代議長となる左派のラジミール(П. Е. Лазимир)が含まれている<sup>38)</sup>。オレーホヴァの研究によれば、ペトログラート軍事革命委員会の明確に確認できるメンバー80人のうち、20人を左翼エスエルが占めていた<sup>39)</sup>。

34) 《Знамя труда》, 20 октября, 1917.

35) Протоколы первого съезда партии левых социалистов-революционеров (интернационалистов). 1918, с. 39. 以後 Протоколы I съезда と略記。ラドキーも指摘しているように、シターインベルクは蜂起に反対する当時のエスエル左派の立場を、同じカムコーフの引用で説明しようとしているが、その内容が、本文で述べたことと若干異なっている。そのポイントは、シターインベルクの引用句では、今は民主主義派はソヴェト大会で自らを固め、憲法制定議会が権力問題で裏切るか動揺するかする時機を待つべきだとなっている点にある(И. штейнберг. От февраля по октябрь 1917 г. Берлин-Милан, с. 123)。ラドキーは、シターインベルクはここで自分の見解を述べているにすぎないのではないかといい、対照的なコレガーエフの見解(連立政府即時廃止・ソヴェト大会による新政権樹立要求)をつけ加えている(Radkey, *op. cit.*, pp. 99-100 n.)。大会前の蜂起に反対するエスエル左派指導層の間でも、対案となる大会でのソヴェト政権樹立の必要条件・時機設定等の点では、微妙な意見の違いがあったのである。

36) 加藤一郎, 前掲論文, 97頁も参照。

37) Хроника, с. 416.

38) Октябрьское вооруженное восстание, кн. 2. с. 240-241.

39) Е. Д. Орехова. О составе петроградского военно-революционного комитета.—《История СССР》, 1971, №. 2, с. 124-125, 129. 残りの内訳は、ポリシェヴィキ53, アナキスト1, 統一派国際主義者1, 不明5。なお左翼エスエルの20人のうち、半数以上は11月末に参加したものであり、蜂起の時期に活動していたのは若干名にすぎないとされている。

首都をとりまく各地の動きをみても、蜂起の流れに合していくエスエル左派の行動の軌跡は少なからぬ事例で知られている。そのひとつ、イリュエヒナが引用しているドゥイベンコ (П. Е. Дыбенко) の回想によれば、10月23日にゲリシングフォルスで共同の武装行動をめぐるエスエル左派との交渉がもたれ、当初その代表 (ウスターノフ А. М. Устинов, プロシヤン П. П. Прошьян) は蜂起の成功を信ぜず、メンシェヴィキとの交渉を提案していたが、その夜の艦艇委員会・連隊委員会の総会は、エスエル左派のメンバーの支持もえて、いかなる後退も妥協も認めないというツェントロバルトの決議を通過させ、行動の指導と調整にあたる「トロイカ」(スミルガ Смилга, ドゥイベンコとエスエル左派のシシコ Шишко) を選出したという<sup>40)</sup>。また、上のペトログラート軍事革命委への言及を補う意味で、中央工業地帯、ウラル、ヴォルガ中・下流域を対象としたツイプキナの検討結果から、23の県軍事革命委の党派別構成に関する数字を示しておけば、氏名の確認できる171人のメンバーのうち、約2割に当たる34名が左翼エスエルとなっている<sup>41)</sup>。

これらの動きは、エスエル左派の「上部」からの「指導」があって生じたものではなかった。そのことは、すでに述べた指導層の蜂起に対する姿勢からもいえるし、そもそもエスエル左派はまだ組織的な統一党になっていないことから推察できる。ラズゴーンによれば、エスエル左派のブハールツェフ (П. В. Бухарцев) は、レーニンから同派の蜂起に対する態度を聞かれて、次のように答えたといわれる。「エスエル左派は中央委員会や確定した方針をもっていない。今日彼らはあなた方と一緒にだが、明日はあなた方に対立する。……地方では、大衆の中では、エスエル左派はあなた方と共にいる。しかし、予備議会のエスエル左派の指導的中核は、チェルノーフと談合し、あなた方に対抗して党の方針をまるごと変えさせる期待を失っていない。だから、エスエル左派は動揺し、蜂起に手間どっているのだ<sup>42)</sup>」。武装蜂起の直前にエスエル左派が軍事革命委員会に参加したことに触れたブハールツェフは、それは「『多く』の指導者の『希望とかわりなく』生じた」と言いそえている<sup>43)</sup>。

武装蜂起へのいわばプラスの反応という点で、「上部」は「下部」を動かしたとはいえない事情にあったが、「下部」は「上部」を動かしたということは可能ない方かもしれない。ソヴェト史家グーセフは次のように記している。「ようやく十月革命の直前に、下部からの圧力を受け、長い論議の末、たくさんの注釈つきで、エスエル左派の代表は軍事革命委員会の成員に参加した<sup>44)</sup>」。この「注釈つき」参加の事例を捜すとすれば、先に言及した左翼エスエル党創立大会でのカムコーフ報告の一節を挙げうるであろう。そこで彼は、蜂起の1日前に、軍事革命委員会を直接的権力奪取の機関ではなく、革命防衛の機関とみなすという決議をポリシェヴィキに受け入れさせ、エスエル左派も革命防衛機関から

40) Р. М. Илюхина. К вопросу о соглашении большевиков с левыми эсерами (октябрь 1917 — февраль 1918 г.). — «Исторические записки», № 73, 1963, с. 8.

41) Р. Г. Цыпкина. Военно-революционные комитеты в октябрьской революции. М., 1980, с. 77.

42) А. И. Разгон. ВЦИК Советов в первые месяцы диктатуры пролетариата. М., 1977, с. 89. 点線部分は引用者による省略。以後も同じ。

43) Там же.

44) グーセフ, 前掲訳書, 92頁。

可成の規模で軍事革命委員会へ参加したという趣旨のことを述べているのである<sup>45)</sup>。

勿論このような軍事革命委への参加の仕方は、グーセフもすぐあとから続けていうように、彼ら指導層が武装蜂起に同調する立場に変わったことを意味するものではない。また、カムコーフのいう「参加」それ自体も、すでに触れた組織的実状の下では、何か公式の党の動きの如くに過大視することもできないであろう。しかし、エスエル左派の指導層の中に、この時期、蜂起へ向かう流れに立ちはだかるのではなく、それを傍観するのでもなく、その内部に位置して流れの方向を正そうと意図する試みが考えられたことは、この決定的対決の中で形成される勢力配置において、彼らを「ポリシェヴィキとバリケードの同じ側に<sup>46)</sup>」位置させていく実践的契機のひとつとなったと思われる。そして、この基礎的背景となっているのは、自派の黨員をもまきこむ蜂起への大衆的な結集の動きであり、さらにその動きが、「勤労大衆の切実な利害によって否応なくひき起こされた<sup>47)</sup>」ことへの彼らの洞察であった。

だが、エスエル左派の指導層が自らの立つべき位置を最終的に決断するのは十月武装蜂起のさなかであり、しかもそれは、迷うことなく選びとられたものでさえなかった。其の後中央委員会に名を連ねるマールキン(Б. Ф. Малкин)が、同じ第1回党大会の席上で述べた率直な述懐を次に引用しよう。「ポリシェヴィキの蜂起が遂行された時、われわれはそれを事実として受け入れ、そこから結論を引き出さねばならなかった。第一の結論は、われわれはスモールヌイの中に在るべきか、それともその外に在るべきかという点にかかわっていた。われわれは非常に強く動揺した。蜂起の開始期に考えこんでいてはならず、行動する必要があった。フラクツィヤは、革命の義務がここに在れと命ずる所に居なければならぬと心に期していたが、それはスモールヌイに在ることであり、その通り、われわれはとどまった。これは十月革命闘争の第1期——軍事的闘争の時期であった<sup>48)</sup>」。われわれは、次章の初めに、この決断の経過と論理をいさ少し立ち入って検討したいと思う。

## II. 「革命統一戦線」から「国際主義統一戦線」へ

### (1)

10月27日の『ズナーミャ・トルダー』は、2ページにわたるムスチスラフスキーの大きな論説を掲載し、十月武装蜂起のさなかにおけるエスエル左派指導層の代表的見解のひとつを公にした。

この論説は、「10月25日晚6時」、「夜の3時」、「10月26日晚8時」という時間の表示で区切られた3つの部分に分かれている。その第一の部分で、ムスチスラフスキーはポリシェヴィキの蜂起をとりあげ、政府の「消滅」をもたらしたその「変革」、とくにその「手段」は、時宜をえないもの、そして国家構成の問題で「主権をもつ大会」を既成事実の前に立たせたものとして、二重に許し難いと「深い悲しみをもって」指摘する。しかし、彼

45) Протоколы I съезда, с. 40.

46) О. Н. Radkey, *op. cit.*, p. 143.

47) Протоколы I съезда, с. 41.

48) Там же, с. 96.

がいうには、非難は事実を——「ロシアには権力がない」という事実を少しも変えはしない。ポリシェヴィキのみを舞台へ残し、脇へ退いて、彼らの完全孤立を、その破局を待つという党派的計算は、ロシアを反革命、内戦へ導き、ポリシェヴィズムの破局ではなく、革命の破局、国の破滅をもたらす。必要なのは、あらゆる党派的障壁を一掃し「革命統一戦線 (единый революционный фронт)<sup>49)</sup>」を「コルネーロフの時よりも」緊密に結束させ、「同質の政府」を作ることだとする。

つづく第二、第三の部分は、第一の部分に比して短く、いわば補説ともいうべき部分にあたる。その力点は、第二の部分では、第2回ソヴェト大会から退場し、大会を決裂させた「中央派社会主義諸党」の行為に対する厳しい弾劾、様々な側面からの批判におかされているが、その背後から、本来ならポリシェヴィキが少数となり「革命統一戦線」の決定に従わざるをえなかった筈なのに、という慨嘆も顔をのぞかせている。第三の部分で中心となる点は、統一戦線に論及した部分であろう。統一戦線の代りに非妥協的に敵対する2つの陣営があると切り出した彼は、だが彼らは「上層」であり、「大衆」に関していえば、そのような敵対状態はないと指摘し、「上層」とのではなく、「大衆」との統一戦線の実現の可能性を信ずるといふ。末尾の方で彼は、「ポリシェヴィキの大衆と昨日まで『中央派』メンシェヴィキと『公式の』エスエルに従っていた大衆、党組織とを結合し統一する環」たりうるのは、エスエル左派のみだと強調している<sup>50)</sup>。この場合、「大衆」とは、上記の引用句も示唆するように、大衆そのものというよりは、党派に属する大衆を指すものと考えられるが、それにしても、平板な諸党派の統一という視点にとどまることなく、「上層」と「大衆」との区別に立脚した統一の視点が、すでにこの時期に明確に語られていたことは、注意するに値するといえよう。

いずれにしても、ここに「革命統一戦線」という課題が前面に登場してきたことが知られるのであり、それはまた、「革命的民主主義派の統一戦線 (единый фронт революционной демократии)」という表現にも言い替えられて、十月武装蜂起後の一時期、エスエル左派の最も重要な活動目標とされるのである。そのことは、この「革命的民主主義派の統一戦線を！」というスローガンが、例の全段ぬき大見出し風のスタイルで、10月27日の『ズナーミャ・トルダー』の冒頭に掲げられ<sup>51)</sup>、後述する左翼エスエル党創立大会の頃まで下されることがなかったことから知りうるであろう。ここでいう革命的民主主義派とは、何よりもソヴェトに結集してきた諸組織とその構成員の総体を意味する言葉であり、政治的には、普通「エスエスからポリシェヴィキまで」という修飾句つきでイメージされるすべての社会主義諸党派によって代表される。従って、この時期のエスエル左派にとって、「革命的民主主義派の統一戦線」あるいは「革命統一戦線」は、しばしば統一戦線の再生という言葉が語られていたことから分かるように、先ずもって、十月武装蜂起と一

49) 和田氏の訳語を用いる。その内容の捉え方をも含めて、前掲論文、36頁、参照。

50) 《Знамя труда》, 27 октября, 1917.

51) 手許のマイクロ・フィルムには第53、54号(10月25、26日)が欠けているため、この大見出し風のスローガンが登場した最初の日がいつかは今のところ確定できない。なお、第55号の「革命的民主主義派の統一戦線を！」というスローガンの下に、「全ロシア労働者・兵士・農民代表ソヴェト大会」というスローガンが並べられていたが、後者は次号から61号までの間になくなった。

部ソヴェト諸党派の大会脱退によって生じたソヴェトの分裂状態を克服し、ソヴェトの再生とそれを基礎とする新政権の構築をめざす実践のスローガン、目標、課題として受けとめられていたのである。

ところで、ムスチスラフスキーは、その論説を「フラークツィヤ会議の新鮮な印象の下で<sup>52)</sup>」書いていることを文中でもらしているのであるが、第2回全ロシア労兵ソヴェト大会の開会前、25日12時に開かれたエスエル・フラークツィヤ会議は、その後の大会会期中も断続的に集まりをもち、大会への参加問題、政府形成の問題等について討議を交わしている。次にこの会議の内容を一瞥し、そこでの諸発言の中から把握されるエスエル左派の見解と動向を摘記して、ムスチスラフスキー論説を手がかりとした上記の記述を補なっておこう。

この会議では、エスエル中央委員会を代表してゲンデルリマン (М. Я. Гендельман) が発言し、中央派と左派の唯一の相異は同質政府創設の可能性の評価にあるとした上で、同質革命政府はポリシェヴィキのヘゲモニーの下におかれるだろうが、そのポリシェヴィキ自身はスチヒーヤ (стихия) の支配下にある、ポリシェヴィキの完全孤立が必要であり、彼らとは一切接触すべきでない」と主張した。これに対して、カムコーフ、カレーリン (В. А. Карелин)、マールキンらが反論を加え、ゲンデルリマンの激しい攻撃からポリシェヴィキを擁護しようとする。「ポリシェヴィキの孤立化——それは現実からの離脱、遂行されつつある世界的諸事件からの自分たち自身の孤立、歴史の片隅へのエスエル党の退行に等しい」というカムコーフの発言がそれを代表する。カムコーフは、26日のペトログラート委員会・地区委員会の緊急会議でも、客観的事態は「多分ポリシェヴィキの、公式にはソヴェトの権力」の周囲に大衆が立つという展望を示しているとし、「彼ら〔ポリシェヴィキ〕は力だ。われわれはそのことを認め、かつ、対等なものとしての彼らと話合うだろう」と述べているが、このようなポリシェヴィキの「力」に対する率直な評価は、決してカムコーフだけのものではなく、この時期のエスエル左派に殆んど共通したものとすら言えてよい。

このあとフラークツィヤ会議は、ポリシェヴィキとの接触委員会選出を多数で承認し、さらに全ロシア・ソヴェト大会への参加・不参加の問題について、脱退支時63、参加支持92、棄権9をもって、大会への参加を決定する。この票決結果をみて、「中央派」は別のフラークツィヤを作ると声明し、会議を脱退するので、以後の会議は事実上エスエル左派のフラークツィヤ会議に変わるが、「夜の2時に」再開したこの会議は、改めて、ソヴェト大会にとどまり、「大会と他の革命的民主主義派とを結合する環、仲介者となる任務を自らに課する」ことを決定するのである<sup>53)</sup>。

26日のフラークツィヤ会議では、「ポリシェヴィキとエスエル左派からなる政府を構成するというポリシェヴィキの決定に関する問題」が討議された。周知のように、この日ポリシェヴィキ中央委員会は、ソヴェト大会に人民委員会議の「閣員名簿」を提出する前

52) Там же. Мусчислафскийはこの会議の議長となっている。

53) Там же; 《Дело народа》, 26 октября, 1917. 後者では、大会参加問題での表決結果は、60対92と報じられている。

に、エスエル左派の「もっとも著名な3名」をその会議に召致し、新政府への参加を提案していたのである<sup>54)</sup>。

これをめぐる討議の中では、提案の受諾は「革命の運命を銃剣の切先の前へ立たせることを意味する」というウスチーノフの発言や、ポリシェヴィキが、他の社会主義諸党にも「全民主主義派の革命政権を構成する提案をした場合にのみ大会にとどまりうる」というシレーイデル (A. A. Шрейдер) の発言が示すように、ソヴェト大会残留の決議も覆しかねないポリシェヴィキ不信の反対論が出されたが、他方ではカムコーフが、最後通牒をつきつける立場は「焦慮と傷つけられた党の自負心にかられた虚弱な立場」だとたしなめつつ、ポリシェヴィキぬきで権力を組織することは不可能であり、大会を離脱した者たちが「協定の橋を破壊したのだ」と述べて、エスエル、メンシェヴィキの側へほこ先を向けた。エスエル中央派のゴーツ (A. P. Гоц) らは「ポリシェヴィキと共に政府へ参加しないと公言」していたからである<sup>55)</sup>。

この問題で、その後の決議の趣旨を比較的よく示した発言は、カレーリンのそれであろう。その要点は、ポリシェヴィキの孤立は破滅を招き、民主主義派の分裂は反革命の勝利をもたらすが故に、「われわれの基本的理念となるのは民主主義派の権力機関の創設」であり、「われわれは今は調停者の役割を果たす」べきこと、「ポリシェヴィキに革命的民主主義派のブロックを形成するよう提案」し、「そのブロックにわれわれも参加する」こと、もしも交渉が不調に終わっても、ポリシェヴィキを誠実に支持するが、調停者の役割を失わぬために政府へ参加しないこと、という諸点にある。同日夕刻のフラーツィヤ会議は、カレーリンの提案に基づいて、「同質のポリシェヴィキ政府」に反対するが、「大会にはとどまり、中央執行委員会へ参加する」という趣旨の決議を採択した<sup>56)</sup>。再々の確認で大会残留は決したが、ポリシェヴィキの入閣提案は、この時点では拒否されたのである。

## (2)

このあと政府構成をめぐる諸党派間の接衝は、ヴィグジェーリがよびかけた全社会主義政党的の代表者会議へその主要舞台を移していく。ソヴェト大会を脱退したエスエル・メンシェヴィキ勢力のこの会議へ臨む方針は、10月29日のエスエル中央機関紙『デーロ・ナロード』の第4面全部を使って大きく掲げられた簡明な政府スローガン、その政綱となる4つの要求に示されていた。その政府スローガンとは、「同質の社会主義政府——ポリシェヴィキと有産階級を除いて」であり、4つの要求とは、大要、ポリシェヴィキの冒険の清算、農用地の土地委員会による管理、無併合・無賠償・民族自決の早期講和、憲法制定議会の即時召集である<sup>57)</sup>。これに対するポリシェヴィキの立場は、カーメネフの妥協の動きなどが生ずる中で、自己の確固たる原則を明示するべく提起された11月1日付の「社

54) 『レーニン全集』26巻、大月書店、311頁、参照。Р. М. Илюхина, указ. статья, с. 11. レーニンのいう「もっとも著名な3名」とは、カムコーフ、スピロ、カレーリン。

55) 《Знамя труда》, там же.

56) Там же. なお、カレーリンの発言は、「最近の党評議会左翼によって選出されたエスエル左派集団を代表して」なされたことが議事録に記されている。

57) 《Дело народа》, 29 октября, 31 октября, 1917. 和田春樹、前掲論文、38頁、参照。なお、ヴィグジェーリ主催の会合の全経過についても、同論文、38-40頁、および石井規衛、前掲論文、4-6頁を参照。近年のソ連の文献では、А. И. Разгон, указ. соч., с. 114-167 にくわしい。

会主義諸党との協定の条件に関する全ロシア中央執行委員会ボリシェヴィキ・フランクツィヤの決議」に集約的に示される。その基本点は、ソヴェト政権の政綱の承認、反革命派との闘争、第2回ソヴェト大会を唯一の権力の源泉として承認、中央執行委員会への政府の責任制、中執の補充である<sup>58)</sup>。

ソヴェト中央執行委員会に参加しながら、「革命統一戦線」の再建をめざして「仲介者」「調停者」の役割を果たそうとするエスエル左派は、士官学校生徒の反乱やケレンスキーの首都進撃など、内戦の危機が深まる中で、事態を打開する決め手とみなす「同質社会主義政府」の早期実現を旗印に、この時期、ボリシェヴィキの側へも譲歩を求め、それを拒む「ボリシェヴィキ過激派」(レーニン、トロツキーら)への批判を強めていった。上記の「協定の条件」に関するボリシェヴィキの決議に対しても、当日は一時反対しながらも結局は賛成にまわったが、次の日の2日には、モスクワでの同志間の内戦の知らせやカーメネフらとの接触によってまたも態度を一変させ、決議の再検討を要求するのであった<sup>59)</sup>。再検討を求めたエスエル左派フランクツィヤの決議は、その根拠を列挙した中で、ひとつの政治グループの独裁は不可避免的に勤労者へも苛酷な抑圧をもたらすとして、出版に関する政策などを例に挙げ、さらに、中央執行委員会でのボリシェヴィキの立場は、全社会主義派の権力創設を不可能にさせ、それによって国をさらなる内戦の淵へおしやるものだと非難している<sup>60)</sup>。

ここで触れられている出版政策への指弾は、軍事革命委員会による出版規制を追認し、労農政府への反抗・不服従を呼びかけるものなど、3項目に抵触する出版物の発行禁止を定めた人民委員会議の「出版にかんする布告」を問題としていることは明らかであるが、ソヴェト中執の場としては、11月4日にこの問題が討議され、ここでもエスエル左派とボリシェヴィキは激しく衝突した<sup>61)</sup>。トロツキーやレーニンの説得に対して、例えばカレリンは、「紙の比例配分は恰も思想の比例配分に似ており、思想の社会化の如きはまったく馬鹿げている」と応酬し、マールキンは、「われわれは武器の批判は認めないが、批判の武器は自由ロシア共和国のいかなる者にも許さるべきだ」と叫んだ。同様に布告に反対しその撤回を要求するボリシェヴィキのラーリン(Ю. Ларин)の決議案が否決され、多数で布告が承認されると、エスエル左派フランクツィヤは、これを「政治的テロルの体制と内戦の煽りたて」だと抗議し、自派の全代表を軍事革命委員会などから召還する、という声明を発表した<sup>62)</sup>。

この中央執行委員会の記録とエスエル左派の声明が掲載された11月5日付『ズナーミャ・トルダー』には、ムスチスラフスキーが「もうたくさんだ」と題する論説を書く。こ

58) Триумфальное шествие советской власти, ч. 1. М., 1963, с. 67. 以後 Триумфальное шествие と略記。また、ラスゴーンの史料批判によって再構成された決議のテキストについては、А. И. Разгон, указ. соч., с. 136-137, 296-297.

59) А. И. Разгон, указ. соч., с. 142-147.

60) 《Знамя труда》, 4 ноября, 1917.

61) この経過については、藤田勇「ロシア革命と基本的人権」東京大学社会科学研究所編『基本的人権 3・歴史 II』東大出版会, 1968年, 331-335頁; 藤井一行『社会主義と自由』青木書店, 1976年, 144-146頁; 加藤一郎「統一戦線の時代」『月刊労働問題』, 1977年7月, 99-100頁, 参照。

62) 《Знамя труда》, 5 ноября, 1917.

の題名は次のような文中の一句からとられている。「書くべきことも、言うべきことも、考えるべきことも、ただひとつのことを除いて外にはない、——『ボリシェヴィキ過激派』の小さなグループによって現代国家を統治しようというこの無分別な企てはもうたくさんだ」<sup>63)</sup>。彼は、十月「変革」(彼は「革命」と称することに疑問を呈する)の権力は勤労人民の権力ではなくて、「人民委員」の権力にすぎず、人民はその信任を得ている全人民政党的同質政府を要求していると続け、「『人民委員会議』——仮の権力の『保持者』」はこの要求に応ずるべきだと、辞任要求をつきつけている<sup>64)</sup>。

ムスチスラフスキーがこの論説を書いていた時、カメネフ (Л. Б. Каменев) ら5名の中央委員辞任、ノギーン (В. П. Ногин) ら「人民委員グループ」の辞任の声明(4日)をすでに知っていたかどうかは定かでない。だが同じ号にノギーンらの声明は収録されている。このボリシェヴィキ一部指導層の公然たる党中央への反乱の動きは、それが「全ソヴェト政党による社会主義政府の形成<sup>65)</sup>」というエスエル左派と類似した立場から生じたものであるだけに、彼らのボリシェヴィキ批判にひとつの勢いを加える要素となった。「ボリシェヴィキの権力奪取の最後の段階がわれわれの眼前にある」。「すべての傑出したボリシェヴィキがレーニンとトロツキーを見捨てた」<sup>66)</sup>。レヴィン (В. М. Левин) の論説「テロルへの道」(11月7日)にみられるこうした言葉は、ほんの一時期とはいえ、エスエル左派の間に、早晚ボリシェヴィキ政権は自壊するという見通しまで生じたことを示している。

しかし、ボリシェヴィキとエスエル左派の関係が険悪化したかにみえる「ヴィグジェーリの時期<sup>67)</sup>」も、十月蜂起から両者の政府ブロックが成立するまでの時期全体の流れに位置づければ、比較的短い表層の渦流に類する時期とみれるであろう。後述するように、両者の関係がおりなす流れの大方向は、両者の接近を促す底流によって規定されていた。また、両者の対立が激化した時でも、幾度かの危機はあったにせよ、両者がソヴェトを共通の基盤とする配置は変わることがなかったのであり、例えば、「出版にかんする布告」に抗議してエスエル左派代表が軍事革命委員会から引揚げた時も、彼らは「労働者と農民の真の利益擁護のため、革命的民主主義派の全権機関としての中央執行委員会の成員にはとどまる<sup>68)</sup>」ことを合わせて明確に声明していたのである。その意味では「革命統一戦線」をめざす「仲介者」の場は、いわゆる「第三勢力」の中にあつたのではなく<sup>69)</sup>、やは

63) Там же.

64) Там же.

65) Протоколы центрального комитета РСДРП (6). Август 1917—февраль 1918. М., 1958, с. 136.

66) 《Знамя труда》, 7 ноября, 1917.

67) マールキンは、「軍事的闘争の時期」に続く第2期、ヴィグジェーリの下に集まり、右派との協定の成立をめざして努力した時期を、「協調の時期」または「ヴィグジェーリの時期」と名づけた(Протоколы I съезда, с. 96)。

68) 《Знамя труда》, 5 ноября, 1917.

69) この点は指導的メンバーが十月蜂起の直後に自覚的に主張していた点でもあつた。一例を挙げればカムコーフは10月26日のペトログラート委員会・地区委員会緊急会議で、「……革命の危機的時機にあつて、いかなる革命的社会主義党も、責任を逃れ、第三勢力のようなものを作り出してはならない」と発言している(《Знамя труда》, 27 октября, 1917)。

り「ポリシェヴィキとバリケードの同じ側に」あったのであり、自らをここに位置づけた内的論理は、渦流の中でも見失われることはなかったといえるだろう。

実は11月5日の紙上で論説「もうたくさんだ」を書いたムスチスラフスキーは、その前日も署名入りの論説を發表しているのであるが、それは、この内的論理を、エスエル左派の側から捉えたポリシェヴィキとエスエル左派を繋ぐ論理を、比較的鮮明に示した論稿として、注目すべき内容をもっている。その要旨は次のようになるろう。

彼は先ず、ロシア社会主義思想の2つの潮流——エスエル派と社会民主主義派——の伝統的な反目は、戦争を受け入れ革命を受け入れない防衛主義派と戦争を受け入れず革命を受け入れる国際主義派との、より鋭い非和解的な反目にとって代わられたと述べる。国際主義派の背後には勤労人民がいるが、防衛主義派は中間層に依拠しており、社会主義の一翼というよりは、急進社会主義、すなわち自由主義的ブルジョア、マニーロフ的社会主義の党なのである。国際主義派の内部では、「ポリシェヴィキ政権」の問題も含めて、対立は「戦術的」なものであり、どんなにそれが激化しても同一党内の国際主義派と防衛主義派との間にみられる対立ほどにはならない。綱領上の相違も、左翼社会民主主義派が自己の農業綱領を放棄したので著しく緩和したし、同じことはその他の相違についても起こるだろう。残る違いは生活感覚そのもの、気分(мироощущение)であるが、これは「教会」の問題であり、「国家」から分離されねばならない。今や国際主義派のグループは「『単一社会主義党』たるべき時だと考える<sup>70)</sup>」。

このムスチスラフスキーの見地をそのままエスエル左派指導層全体の立場とするのは勿論行きすぎであるが、その論旨を貫く国際主義への献身、防衛主義への糾弾は、同派が共有する出発点、基本的価値観として、十月の変革を経た後も強まりこそすれ決して捨て去ろうとしなかった原点、原理的立場として、確認されてよいであろう。ヴィグジェーリの努力も左右両端の原則的主張のはざままで実を結びえず、「同質社会主義政府」の形成が不可能と意識された時<sup>71)</sup>、残された左翼の結集を国際主義的翼の統一として把握し推進しようとする動きが生じたとしても、上述した立場を考慮すれば少しも不思議なことではなかった。だが、現実の政治過程においては、この時も上からというよりは下から、いわば底流が表出する形で実践的な方向づけが提起され推進されていく。

このような動きの最初に属するもののひとつとして、われわれは11月8日に採択された「エスエル左派軍協議会決議<sup>72)</sup>」を挙げることができる。この決議の要点は、交渉を不調に終わらせた責任は「革命的民主主義派の右翼分子」と「ポリシェヴィキの一部指導者」にあるものと考え、左右の「非和解的翼を孤立させる全国際主義的分子の統一が不可欠で

70) 《Знамя труда》, 4 ноября, 1917.

71) ラズゴーンによれば、社会主義諸党の協定の条件、「同質社会主義政府」の形成に関する問題が独立した議題とされた最後の中央執行委員会総会は、11月6日であった。この席上、カレーリンは「右翼社会主義諸党との協定はだめになろうとしているが、左翼間の協定についての交渉は可能である」と発言したといわれる(A. И. Разгон, указ. соч., с. 166-167)。

72) この会議は、ペトログラート守備隊の全部隊、イノ・クラスナヤ・ゴルカ・クロンシタット要塞、ネヴェ川の全軍艦を対象に、各中隊、各艦乗組員から1名ずつのエスエル左派代表を集めて、11月8日に開かれた。決議の表決は賛成54、反対2、棄権5である。《Знамя труда》, 6 ноября; 9 ноября, 1917.

ある」とし、そのために他の諸党派の動揺が続く時は「その同調を待つことなく、エスエル左派の政府への参加が不可欠」であり、このような政府のみが「軍事独裁に終止符を打ち」、革命的民主主義派の権力実現へ導くことができるという点にある<sup>73)</sup>。ここで実践的方向としては、「国際主義的分子の統一」と「エスエル左派の政府への参加」の2点が提起されていることに注意しておこう。

さらに11月11日には、臨時全ロシア農民代表ソヴェト大会のエスエル左派フランクツィヤの決議が「権力の組織に関する問題」で6項目からなる原則的方針を提示した。それを簡潔にまとめれば、次の通りである。(1) 労兵ソヴェト・農民ソヴェト両執行委員会の対等な原則に立つ合同、(2) 上記執行委員会によるエヌエスからポリシェヴィキまでの全社会主義政党からなる政権の組織、(3) 左右の過激派グループがこのような政権を拒否した際は、政権は執行委員会の協定政綱を受け入れる社会主義的、職業的グループによって組織されること、(4) 社会主義戦線の統一破壊を避けるため、個々の候補者の否認を最後通牒的に提起しないこと、(5) 国際主義派へ閣僚の多数を保証すること、(6) 政権はソヴェト大会の政綱の実現のために組織されること<sup>74)</sup>。——この決議が労兵・農両ソヴェト統一への決定的前提となったという点で大きな意義をもったことはいままでのないが、同時にここでは、先の軍協議会決議と基本的に合致する国際主義派主導の政府形成へ踏み切る方針が明確に打ち出されたという点に、やはり注意を促しておきたい。

もとより、これらの決議は、エスエル左派の足並みを直ちに統一して、一直線に目標をめざす活動へつながったわけではない。例えばカムコーフは、エスエル左派軍組織協議会で、依然として「革命統一戦線」の必要を強調し、「エスエル左派代表の入閣は何のたしにもならない<sup>75)</sup>」と発言している。しかし、同じ会議でスピリドノヴァは、「現時点に関する報告」を行ない、エスエル左派がポリシェヴィキを支持しているのは、彼らが人民と共に進んでいるからであり、「われわれは人民が誤まっている時でも、人民と共にあらねばならない<sup>76)</sup>」と語っていた。こうした発言は、ポリシェヴィキと共にソヴェトにとどまった自らの心情を吐露する言葉として、当時、しばしば指導層が口にしていたのであるが、とくに上記の農民代表大会のフランクツィヤ決議は、ロシアの人民そのものである農民の動向を直接に反映したものとして、その指導層を含むエスエル左派全体の動きに強い影響を及ぼしたことは間違いない。

ここで臨時農民代表ソヴェト大会(11月11日—25日)の経過それ自体に立ち入るつもりはないが、文脈に沿って上述したエスエル左派フランクツィヤの決議の行方についてだけ触れておくと、12日夜の会議で、3つの派(エスエル—マクシマリスト、エスエル左派、ポリシェヴィキ)から持ちこまれた「権力問題」に関する決議のうち、エスエル左派フランクツィヤの決議を基本とすることが127対45で決まり、13日の会議で、その決議案が幾つかの修正を付された上、175対22(棄権6)で承認された<sup>77)</sup>。このあと決議第1

73) 《Знамя труда》, 9 ноября, 1917.

74) 《Знамя труда》, 14 ноября, 1917.

75) 《Знамя труда》, 12 ноября, 1917.

76) 《Знамя труда》, 11 ноября, 1917.

77) 《Знамя труда》, 15 ноября, 1917. フランクツィヤ決議と承認された決議とは、前者の第4, 5項

項にある合同執行委員会の内部構成等をめぐる両幹部会の交渉と合意（「協定」）を踏まえて<sup>78)</sup>、ついに15日、労兵ソヴェト中央執行委員会・ペトログラート労兵ソヴェトと臨時農民代表ソヴェト大会との合同会議が実現する。スヴェルドローフの挨拶に続いて、農民大会議長として登壇したスピリドノヴァは、「ロシアの労働者と農民の兄弟の如き同盟——それは全世界勤労者の自由な融合への深い衝動をもたらす最初の行為である」と「熱烈な挨拶の言葉」を述べている<sup>79)</sup>。

こうして出発しえた労兵ソヴェトと農民ソヴェトの合同中央執行委員会は、11月17日、「人民委員会議成員の変更について」次の3点を決定した。(1) 農業省のエスエル左派への委譲、(2) 全人民委員会議参与会へのエスエル左派代表の参加、(3) 農業省へのポリシェヴィキ代表の参加<sup>80)</sup>。周知のように、第1項に基づくエスエル左派の農業人民委員にはコレガーエフ (А. Л. Коллегаев) になるが、その候補選定は19日の農民代表大会で承認され、24日の合同中央執行委員会で正式に決定される。この19日の農民大会に関する『ズナーミャ・トルダー』の記事は、コレガーエフの件に続けて、内務人民委員にカレリン、陸海軍人民委員にムスチスラフスキーが推薦されていると報じており、われわれは、17日の決定の頃から、すでにコレガーエフひとりの参加にとどまらぬ本格的な政府ブロック形成の交渉が開始されていることを知りうるのである<sup>81)</sup>。ソ連の研究者ラズゴーンは、ポリシェヴィキとエスエル左派とのブロック形成をめぐる交渉の第2期を、11月17日までとしているが<sup>82)</sup>、上述した経過がもつ少なからぬ意義を考えれば、この日付をひとつの時期の終わり、画期とするのも、確かに根拠のある時期区分の考え方といえよう。

### (3)

11月18日、『ズナーミャ・トルダー』は無署名論説「合同」を掲げ、既述の経過に対するエスエル左派指導層のこの時点での評価・反応を示す。冒頭、この論説は、「11月15日の協定」による労農の戦線の結合をたたえた後、さらに論をすすめて、「わが革命の社会的本質」を本能的に自覚した大衆は、「社会革命の旗」をポリシェヴィキの手にのみ見いだしてその背後についたが、実際はエスエル左派も当初から「社会革命の旗」を掲げてきたのだと指摘し、だが同時に闘争の方法・手段においてポリシェヴィキと異なるエスエル左派が「臨時農民大会に推されて人民評議会〔その成員を拡大した合同中央執行委員会〕へ参加」することは、執行委員会の性格それ自身の変化につながるという点で、大きな意味をもつ筈だと評価する<sup>83)</sup>。つまり彼らは、ポリシェヴィキとの間にある「社会革命」という目標の共通性とそれをすすめる手段の相違性を意識し、そこからまた、両者の提携が

が消えたことなど、若干違っている。

78) См. Триумфальное шествие, с. 92-93.

79) 《Знамя труда》, 16 ноября, 1917.

80) Триумфальное шествие, с. 97.

81) 《Знамя труда》, 21 ноября; 25 ноября, 1917.

82) А. И. Разгон. К вопросу о складывании блока большевиков и левых эсеров в октябре 1917—январе 1918 г.—В кн.: Банкротство мелкобуржуазных партий России 1917-1922 гг., ч. I. М., 1977, с. 175. なお、第1期は第2回ソヴェト大会前夜と会期中、第3期は11月17日から1918年1月までとされている。

83) 《Знамя труда》, 18 ноября, 1917.

もつ二重の意義，すなわち，戦線の統一と，その内側からの矯正という点を説くわけである。

次の日，19日の無署名論説「協定」は，これとは別の，だがわれわれには既知の角度から，自らも主体的に加わった政治過程の到達点を解説しようとする。その要点は次のようになろう。「すべての真の国際主義的分子の同盟」は偶然的なものではなく，すでに第1回全ロシア・ソヴェト協議会の折，戦争についてエスエル左派はポリシェヴィキと同じ決議をもちこみ，エスエル右派はツェレテリの防衛主義的決議を支持していること，以来，国際主義派の共同行動は止むことなく続き強まり，権力問題，土地問題その他，殆んどすべての問題に及んできたこと，「ポリシェヴィキ過激派」の目的実現の方法には連帯しえないが，革命から逃げ出すべきでなく，エスエル左派は革命委員会その他の戦闘部署にいたが故に行きすぎとも闘いえたこと，ソヴェト中執が労兵2部の時は，エスエル左派は「プロレタリアートと勤労農民の党」として権力へ参加しえなかったが，今や状況は本質的に変化して労兵農3部の合流が成り，かくして「国際主義派の実在する連立」はその「形式上の認証」を得るに至ったこと<sup>84)</sup>。——ここから，半月前のムスチスラフスキーの論説を思わせる国際主義対防衛主義という対抗軸の捉え方が，新しい事態の理解に際して，発展的に受け継がれ適用されていることを見いだすのは容易であろう。

21日の紙上には，やはり半月程前，「ポリシェヴィキの権力奪取の最後の段階」を云々し，人民委員会議の自壊を予想したレヴィンが，署名入り論説を発表し，「われわれエスエル左派は，国の統治に参加している人々と辛い運命を共にすることを決めた。……権力への参加によって，われわれはロシアの運命に対する大きな責任を引受けている……<sup>85)</sup>」と書く。同じ号の第2面には，ルダコフ (С. Рудаков) が「今はポリシェヴィズムは兵士と労働者の声で語り，彼らの願望と期待を表現しているのでないか。今，大衆をたたくがずにポリシェヴィズムをたたくことができるだろうか。……今はポリシェヴィズムとの闘争は，将来の社会主義権力の土台を蝕むことなのだ……<sup>86)</sup>」と書いていた。「ヴィグジェーリの時期」と異なるポリシェヴィキ寄りの明快な論調は，「権力への参加」に踏み切った彼らの決断に対応する。この日，11月21日が，あの全段ぬき大見出し風のスローガン「革命的民主主義派の統一戦線を！」が『ズナーミャ・トルダー』の紙面を飾った最後の日であった。

左翼エスエル党第1回大会が開かれ，エスエル左派が公式に独立した党となったのは，このような政治的気象の下においてであった。大会は11月19日から28日まで続けられる。われわれは以前，エスエル党から左派が分離・独立するに至る経過・背景に主眼点を置いて，この大会の議事録を検討したことがあるが<sup>87)</sup>，本小稿のこれまでの検討経過を踏まえて大会の討議内容を見直すとすれば，看過しえない個所として，22日に行なわれたカムコーフの「全ロシア労働者・兵士代表大会エスエル左派フラクツィヤ活動報告」とそれをめぐる討論を挙げねばなるまい。実は前章の末尾で引いたカムコーフの軍事革命委員

84) 《Знамя труда》，19 ноября, 1917.

85) 《Знамя труда》，21 ноября, 1917.

86) Там же.

87) 前掲拙稿，「左翼社会革命党の成立をめぐる」。

会に関連する言明もこの報告の一部なのであるが、ここでは、その長大な報告の中から、前日まで『ズナーミャ・トルダー』も論じている「権力への参加」に言及している部分だけを取り上げることになる。

カムコーフがそこで、「革命統一戦線」、勤労者の利益擁護、ソヴェト大会が提起した諸要求の実現を、自派の課題として挙げているのは当然とも言えるが、他面で彼は、「テロル路線」をとらず、「市民的自由の復活」政策をすすめる、「真のソヴェト権力」をめざすとして、具体的には、権力としての執行委員会とその執行機関としての人民委員会という体制、前者の許可なしにどんな法令も出しえぬ体制の必要性を強調する。そして、両執行委員会の合同を経て、彼らは、上記の体制をポリシェヴィキに承認せしめるという「大勝利」を獲得し、その時点で「われわれは権力への参加受諾を決定し、わがフラークツィヤはコレガーエフを農相のポストへ送りこみ、左翼エスエルによって占めらるべき他の一連の部署に関する交渉が行なわれている」と報告している<sup>88)</sup>。カムコーフが念頭においている「大勝利」とは、11月17日の合同執行委員会で、既述の3項目と共に決定された「中央執行委員会と人民委員会議の相互関係に関する指示」を指すものと思われる。ラズゴーンが詳述しているように、これを彼らの「大勝利」とする解釈はわれわれも疑問とせざるをえないが<sup>89)</sup>、このような報告の仕方から、「権力への参加」の正当性を、支配的政策の内側からの矯正という点に見いだそうとする彼らの志向を、再確認することはできるだろう。

報告をめぐる討論で注目すべき発言のひとつは、当日の議長でもあるアルガソフの発言である。彼は「報告に反対して」と前置きして話を切り出し、2つの点を主張する。ひとつは、「第二革命」(十月革命)後は反革命の側にエヌエス、エスエル、メンシェヴィキなどもいるが故に「革命的民主主義派」という表現に賛成できないし、「革命的民主主義派の統一戦線」(=「革命統一戦線<sup>90)</sup>」)、「同質の社会主義政府」という表現の使用は「時期おくれの先入見」であるという点、もうひとつは、当初からエスエル左派は人民委員会議へ参加すべきだったという点である。同じ趣旨の意見は、地方から来た他の代議員からも聞かれた。また、その表現よりも中味を変える次のような一代議員の発言も、当時の統一戦線論の問題状況を示す興味ある発言といえよう。「統一戦線の創設を、私はエヌエスからポリシェヴィキにいたる全社会主義派を引入れるようなものとは考えていない。私は、われわれはこの戦線を農民と労働者から作らねばならないのだと考える」<sup>91)</sup>。

討論の途中で、「結語」の前半を反論にさききたいとして発言に立ったカムコーフは、「革

88) Протоколы I съезда, с. 45-46.

89) А. И. Разгон. ВЦИК Советов в первые месяцы диктатуры пролетариата. с. 180-197; Триумфальное шествие, с. 96-97. 「指示」は5項目(СНКのЦИКへの責任制, 全法令類のЦИКによる審査承認, 対反革命闘争措置のСНКによる直接的実施, СНК成員のЦИКでの週1回報告, ЦИКによる質疑への即時解答)から成るが、従来からの確認点や慣例の定式化という性格が強く、細部はともかくとして、エスエル左派の主張が「大勝利」といえるほど影響したとは考えづらい。

90) 『ズナーミャ・トルダー』に載った議事録では、この言葉が使われている(《Знамя труда》, 24 ноября, 1917)。

91) Протоколы I съезда, с. 59-63.

命戦線の統一は思いつきではなく、勤労大衆の声であったが、右翼社会主義派がソヴェト大会の政綱を承認しないのを見て、「われわれは国際主義戦線を密接にし、ソヴェト権力の基礎を拡大した」（傍点は共に引用者）と述べた<sup>92)</sup>。「革命統一戦線」との訣別が主体的提起と客観的状況との両面から迫られる中で、「統一」のレベルが「革命戦線」から「国際主義戦線」へ自覚的に推転されていく様子を、われわれはこれらの意見の応酬からも看取することができる。

カムコーフの「現時点に関する報告への結語<sup>93)</sup>」は、24日に行なわれている。彼は討論で明らかになったこととして、「左と右の2つの戦線」での闘争を口にした。一方の右翼社会主義派と彼らをつなぐ基本点については、旧稿でも提示した右派との第一の相異点<sup>94)</sup>、本稿でもすでに言及されたあの「わが革命の社会的本質」の評価に係わる相異点が指摘され、「革命の社会的性質」を否定した右翼エスエルは「ブルジョアの陣営へ後退した」と断ぜられる。他方の極に位置づけられるのは「ボリシェヴィキ過激派」であるが、注意すべきことは、その指導者の孤立はありえても「ボリシェヴィズムによって指導される大衆運動を孤立させることはできなかった」と語られ、「十月の運動は勤労大衆の中に深い根をもち、政治的社会的経済的原因によってひき起こされた」ことがはっきりと承認されていることである<sup>95)</sup>。すでに「権力への参加受諾の決定」が報告の中で示され、党大会の討論はそれを共通の前提として進行している。「2つの戦線での闘争」は、この時期には、やはり「第三勢力」による「第三の戦線」からなされようとしたのではなかった。

第1回党大会が終りに近づいた頃、第2回全ロシア農民代表大会（11月26日—12月10日）が開かれる。臨時農民代表大会と違って絶対多数をもたなかった左翼エスエルは、ボリシェヴィキの支持を合わせ僅差でスピリドノヴァを議長に据えることができた。激しい対立を見せた憲法制定議会の問題では、右翼エスエルの決議に左翼エスエルの一部が同調し、それが大会を一旦通過するという一幕もあったが、結局は右翼エスエルは大会を放棄し、別個の大会を組織するという経過となることは改めて触れるまでもない。エスエル党両翼の完全分離が生じた状況下では、彼らの主戦場ともいべき農民ソヴェト大会の分裂は必至であった。右翼が退場した時点での両大会の代議員数から見た力関係は、やや左翼に不利な状態であったが、時と共に前者の減少、後者の増加がすすみ、1対2という評価も可能な状態となった<sup>96)</sup>。

この間も左翼エスエルとボリシェヴィキとの政府構成に関する交渉は継続されていた。12月7日、人民委員会議は、左翼エスエルの入閣を「彼らによって提起された条件に若干の修正を付して」承認し、8日、その「条件に関する人民委員会議の観点」を左翼エスエル中央委員会に伝達することを確認したことが知られており、9日には、周知のような

92) Там же, с. 63-64.

93) 結語の前提となる「現時点に関する報告」は、前記のカムコーフ報告、それにつづくアルガソフの軍事革命委員会活動報告、ウスターノフの臨時農民代表大会エスエル左派フラークツィヤ活動報告（いずれも22日）に含まれているものと解される。

94) 前掲拙稿, 54-56頁, 参照。

95) Протоколы I съезда, с. 71-73.

96) Р. М. Илюхина, указ. статья, с. 19-22; О. Н. Radkey, *op. cit.*, pp. 228-248.

人民委員会議の「対案」(左翼エスエル7名の入閣者人名・ポストを含む)が、スヴェルドローフを通じて左翼エスエルへ提示される。その結果については、ラブゴーンが示す人民委員会議議事録が明確にしてくれる。「スヴェルドローフの報告。政府成員に関するポリシェヴィキと左翼エスエルとの完全な協定が成就さる。政府成員へ7名のエスエルが入る。エスエルはソヴェトの政策を遂行する義務を負う。詳細は中央執行委員会の承認後に公表さるべし」<sup>97)</sup>。

12月10日付『ズナーミャ・トルダー』の無署名論説は、このようにして政府構成に関する両党の最終的な協定が成立するに際し、左翼エスエルが、どのような立場でそれを受けとめ、どのような思いをそれに託そうとしたかを簡明に示している。

まず、情勢の極度な困難さに触れたこの論説は、このような時にこそ「ソヴェト党」は「最も責任ある部署への責任ある代表の派遣」によっても「ソヴェトの支持」をなさねばならず、人民委員会議、その全参与会における「党代表部の強化」という「当面の任務」もここから生ずるとする。さらに論説は、一層無条件的にこの歩みを決定づけるものとして、ポリシェヴィキ党とは一連の戦術的問題で相違しているが、「最も主要で本質的なもの」——「ロシア革命を国際的社会主义運動のプロローグとみる見方」、「ソヴェトの役割を当分の間の拠点と捉える見方」によって規定される原則的問題で一致していることを挙げ、ここから「わが強化された『代表団』」には次のような「二重の困難な、しかも切迫した任務」が課されるという。すなわちそれは、第一に「ソヴェト権力の行動路線を矯正すること」、第二に「国際主義統一戦線(единый интернационалистский фронт)をより緊密に結束させること」である<sup>98)</sup>。

12日、『ズナーミャ・トルダー』は、「12月9日から10日にかけての夜に人民委員会議と左翼エスエル党中央委員会の間で達成された協定に基づき、人民委員の成員へ次のような左翼エスエル党の代表が参加する」として、7名の人名とそのポストを報道した<sup>99)</sup>。この記事がトップとはいえ第4面に一種事務的な響きを伴ないつつ報じられたことは、この歴史的な筈の事件が、当時の経過の中ではすでに予測可能な事実となっていたからなのだろうか。いずれにしても、「第2期」の最後に位置する11月17日の合同執行委員会によってルールを敷かれた左翼エスエル・ポリシェヴィキ両党の政府構成をめぐる交渉は、こうして「国際主義統一戦線」の政府の形成に到達した。「最も陰うつな時期」になされたこの選択によって、左翼エスエルは、国際主義派の統一に留意しつつ、政権内部で「有害な衝動的付加物」と闘う「二重の困難な」課題を背負って、新たな段階へ足を踏み入れた。

97) А. И. Разгон. О составе левоэсеровской группы в совете народных комиссаров. Ноябрь 1917 г. — март 1918 г. — В кн.: Большевики и непролетарские партии в период октябрьской революции и в годы гражданской войны. М., 1982, с. 152-153.

98) 《Знамя труда》, 10 декабря, 1917.

99) 《Знамя труда》, 12 декабря, 1917. ここで示されている人名は、П. П. Прошьян, В. М. Алгасов, В. Е. Трутовский, И. З. Штейнберг, А. Измайлович, Михайлов, А. Л. Коллегаев. なおラブゴーンは注97)の文献(с. 153-154)で、この入閣者に細かい検討を加え、最終的な人名の確定作業をしている。重要な問題提起であるが、この点への立ち入った検討は別の機会に譲らざるをえない。

## むすびにかえて

左翼エスエル党の第2回党大会が開かれたのは、これより約4か月が経過した1918年4月のことである。大会3日目に、主要議題のひとつ、「現時点に関する報告」が取り上げられたが、報告者にはカムコーフとスピリドノヴァ、外に副報告者としてシテーインベルク、ウスターノフ、チェレバーノフ、コレガーエフが指名された。最初に報告に立ったカムコーフは、ポリシェヴィキに比して左翼エスエルが「極めて不利な力関係」にあると言及し、「わが綱領の隅石であるプロレタリアートと勤労農民の独裁の問題すら擁護しえなかった」と述べた。彼は、これまで存在してきたのは、勤労農民をではなく、「いわゆる『極貧農』を部分的に引き入れたプロレタリアートの独裁」にすぎないというのである<sup>100)</sup>。さらにシテーインベルクは、「プロレタリアートのですらなくて、その上層部の独裁」だとカムコーフを訂正し、「われわれは真の民主政治（народоправство）へ導く第三革命〔『農民革命』〕の前夜にある」<sup>101)</sup>と言明した。正副6人の報告者が立てられたことは、多様な見解の存在の反映でもあるのだが、労農の同盟の健在を語る言葉は殆んど見られず、多くの者が「人民権力」の「危機」や革命の「一時的下降期」に論及しているのが極めて印象的である。

第2章の末尾で取り上げた12月10日付無署名論説においても、革命情勢は決して楽観的に捉えられていたわけではなかった。また、そこで確認した「革命統一戦線」から「国際主義統一戦線」への移行は、防衛主義派を切り捨てた統一への移行という側面だけを見れば、「広い連立のアイディアを放棄<sup>102)</sup>」した狭い統一への転進ないし後退とみることもできるかもしれない。しかし、労兵ソヴェト・農民ソヴェト合同会議の「お祭り気分、昂揚した喜ばしい雰囲気<sup>103)</sup>」の中で、スピリドノヴァが「労働者と農民の兄弟の如き同盟」をたたえたように、あるいはまた、第1回党大会で一代議員が統一戦線を「全社会主義派」からというよりも「農民と労働者から作らねばならない」と発言したように、「革命統一戦線」の目標を「放棄」していく過程は、具体的な形姿をとって進展する労農の同盟、それを現実的基盤とする国際主義派の統一という認識・視点が、統一戦線概念の中味に入りこみ定着していく過程でもあった。そして、左翼エスエルは、その勤労農民の支持を力として、「統一戦線の2つの大きな翼<sup>104)</sup>」の一方を担いつつ、他方の「戦術的」誤まりを正そうと意図したことは先にみた通りである。

僅か4か月を隔てた2つの時点のこの情況把握の落差は、何によって引き起こされたのか、この間にどのような政治過程が介在しているのか、——この問いについて、勿論われわれは、すでに多くのことを内外の諸研究によって教えられている。それは、本稿の最後でその発足を見届けた「国際主義統一戦線」の政府の活動と崩壊の経過、4か月の政治過程の中心問題を構成するこの歴史的経過についても例外ではない<sup>105)</sup>。しかし、それにも拘

100) 《Знамя труда》, 20 апреля, 1918.

101) 《Знамя труда》, 21 апреля, 1918.

102) O. H. Radkey, *op. cit.*, p. 148.

103) 《Знамя труда》, 16 ноября, 1917.

104) 《Знамя труда》, 6 декабря, 1917.

105) さしあたり、注3)、4)で挙げた文献など。

らず、この間の左翼エスエルの諸行動に内在する彼らの主張と論理が、経過に即して十分に追跡され提示されているかと問われれば、やはりまだなすべき多くのことが残されていると答えざるをえないであろう。われわれは、別の遠からぬ機会に、本稿で試みた検討を続けるこの「統一戦線政府」の時期にまで及ぼし、残された課題の一端を明らかにする役割を担いたいものと考えている。

終りになったが、鳥山成人先生の記念論集に寄稿するに当たり、この場をかりて、鳥山先生から受けたこれまでの御指導に対し、深い感謝の念を捧げたいと思う。非才を鞭うち、先生の学恩に多少ともお応えできたと思える日の近からんことを期するのみである。

## Левые эсеры в октябрьской революции

Кэндзио Такаока

За последнее время у нас в Японии ставится задача пересмотреть взгляды на русскую революцию. В качестве попытки основной работы разрешить эту задачу настоящая статья ставит перед собой задачу исследовать левозэровский взгляд на русскую революцию, точнее, октябрьскую революцию, основываясь преимущественно на сведениях и статьях тогдашних номеров «Знамени труда».

Статья состоит из двух глав. В первой главе автор уделяет особое внимание отношению левых эсеров к плану вооруженного восстания большевиков в октябре. Руководящее ядро левых эсеров относилось критически к плану большевиков, считая восстание в данных условиях, например, «величайшей политической ошибкой». Но увидев, что массы, в том числе массы левых эсеров, были привлечены к восстанию и кроме того это движение было продиктовано «кровными интересами трудящихся масс» и пр., их руководители задумали участвовать в ВРК накануне восстания хотя с оговорками и в конце концов решили остаться «в Смольном» в самое время восстания.

В первые дни октябрьской революции руководящая группа левых эсеров, стоящая на точке зрения «единого революционного фронта» или «единого фронта революционной демократии», ставила себе задачей явиться посредником между Съездом советов и остальной «революционной демократией». А в соответствии с переменами положению вещей, среди левых эсеров появились и усилились такие голоса, что нельзя соединить интернационалистское крыло с патриотическим, что должно создавать единый фронт из крестьян и рабочих и т. д. Таким образом точка зрения «союза рабочих и крестьян» внедрилась в концепции у левых эсеров о едином фронте и на этой основе они пришли к позиции «единого интернационалистского фронта» и к согласию по правительственному блоку интернационалистов.

高岡 健次郎

Во второй главе автор рассматривает такой процесс вплоть до образования большевистско-левоэсеровского СНК, обращая внимание на вышеупомянутую эволюцию понятия у левых эсеров о едином фронте.